

ヨーロッパにおける天理教の伝道の諸相⑫

前回(2026年3月号)では、フランスの宗教活動や文化活動を取り巻く法的な環境について説明した。今回からはそれを踏まえて、フランスにおける天理教の「文化」の「翻訳」について論じていく。

それを進めるにあたり、天理教ヨーロッパ出張所が10年ごとに発行している各年史に加えて、同出張所や天理日仏文化協会が発行した文書や機関誌なども参考にする。なかでも、同出張所が1980年から発行している『天理教ヨーロッパ出張所報』(発行開始当初は『天理教パリ出張所月報』、以下『出張所報』)は、それぞれの月の行事や出来事などを継続的にたどるのに役立つ貴重な資料である。

また、『出張所報』に掲載されている記事は、単なる行事内容の報告にとどまらず、当時の関係者が文化活動を信仰や布教との関わりでどのように捉えていたかを探る貴重な資料になる。後に見ていくように、その両者の関係の捉え方は実に様々であるが、傍目には見逃してしまいかねない微細な発言や試みの中に、それぞれの当事者の目的意識ならびに創意工夫や苦心が多く窺える。そういった声を拾い上げながら、「文化」の「翻訳」のあり方について考察していきたい。

「天理」の名前を広めるための文化活動

まず初めに挙げられるのは、「天理」の名前を広めるための方法として文化活動を捉える視点である。これは、文化活動を通して宗教としての「天理教」やその名前を直接広めるのではなく、天理日仏文化協会や「天理」という名前に対して肯定的な印象を持ってもらうという捉え方である。前回に紹介したフランスの法的環境を踏まえれば、文化活動を目的とする非営利社団が公に宗教の名前を持ち出すことは大きなリスクを伴うため、あくまで同文化協会が冠する「天理」という名前を広めることを主眼にする見方である。

こういった内容は、以前にも少し紹介した「出張文化活動」、すなわち各地の文化団体等に出向いて行われる文化活動の文脈で語られることが多い。出張文化活動は1985年に定着したと言われるが、実際に1985年から89年頃にかけて、『出張所報』にそういった活動の報告が載せられるようになる。活動内容は書道講座、茶会など様々であり、内容によっては文化活動そのものの報告に終始するものもあるが、中には「天理」の名前を広めることを明記している記事も見られる。

その例の一つを見てみよう。これは1989年6月23日に、パリから南に約20kmほど離れた場所にあるモンレリー市(当時は人口5,000人ほど)が主催した日本祭にて、天理日仏文化協会が文化活動を行った時の報告記事である。この活動のきっかけは、この町に住む天理日本語学校の学生であったある夫人を通して、天理日仏文化協会が同市役所から依頼を受けたことであったが、その企画進行は同文化協会が全面的に担ったようである。当日は会場に約200名が集まり、「日本文化紹介の映画、着物に身を包んだパリ在住ようばくによるお茶・生花のデモンストレーション、または恒例の習字による名前書き・折り紙など」が行われ、さらに「所狭しと展示

された日本の歴史、生活習慣、行事などのテーマ別の日本紹介パネル」(天理教パリ出張所1989:6)なども設置されたようで、文化協会側から別の町へ出向いているにもかかわらず、非常に幅広い分野を網羅した内容であったことが窺える。

そして、記事の最後には、この日本祭の様子が6月29日付の地方新聞で報じられた旨が書き添えられ、その地方新聞に載った記事の写真も一緒に掲載されている(記事のタイトルはMonthéry à l'heure japonaise、「モンレリー市、日本文化に触れるひと時」)。ここで興味深いのは、出張所報の記事が以下のように締めくくられている点である。

この日本祭の様子は、地方新聞「ル・レピュブリカン」にも大きく取り上げられるなど、この小さな町にもTENRIの名が確実に広まったことは間違いない。

(天理教パリ出張所 1989:6、強調点は引用者)

ここでは、この出張文化活動を通して、単に日本文化を紹介するだけでなく、TENRIという名前を広めよう意識されていたことが窺える。当然ながら、実際に町の住民がTENRIの名前をどれだけ認知したかは確認しようもないが、それよりも、関係者がそのような認識を持って文化活動を行ったということこそが重要である。とくに、「確実に」や「間違いない」といった強い確信をもって書かれていることから、少なくともこの記事の書き手やその確認を行った関係者は、TENRIの名前を広めるという目的を少なからず果たせたと認識していたと読み取っても概ね問題ないだろう。

後にも見ていくように、こういったTENRIという名前を広めたり、また間接的に天理教やその教えの認知度を高めていくという意識は、天理日仏文化協会の運営に携わってきた多くの天理教関係者の間で共有されており、同文化協会を通しての「文化」の「翻訳」のあり方としては基本的なスタンスとも言えるだろう。

もっとも、この記事だけに関して言えば、『出張所報』の中でも短い記事であり、また一面に載っているわけではないので、見方によっては、そこまで取り沙汰するほどのものではないと思う読者もいるかもしれない。しかしながら、こういった些細な発言や言説の中に、通奏低音のように流れる「文化」を通しての「翻訳」の姿を垣間見ることも出来るのである。

[引用文献]

天理教パリ出張所編(1989)「文化協会レポート—町ぐるみ、日本文化を満喫」『天理教パリ出張所月報』第107号、6頁。



モンレリー市における文化活動の報告記事
(天理教パリ出張所 1989:6)